

【論文】

芥川龍之介「煙草」と切支丹物の出発

—ラフカディオ・ハーン以降の日本のボードレール受容を視座として

小谷 瑛輔

1、芥川における奇妙な「ラフカディオ・ヘルン先生」

芥川龍之介が「羅生門¹」を書く直前の大正4年8月に松江のラフカディオ・ハーン旧宅を訪ねていたこと、その経験が「羅生門」完成に繋がった可能性があることは、既に指摘があるところである。たとえば神田由美子²は次のように述べている。

芥川が、松江滞在中、井川と八雲文学について様々な語らいをしたことは想像に難くない。そして、その語らいの中から、小泉八雲もその〈怪異譚〉に注目した「今昔物語」の価値を再認識し、既に執筆を始めていた「羅生門」完成への足がかりを掴んだのではないかと推察している。

確かに、古典に取材して作品としてまとめなおすという点をはじめ、様々な点でハーンと芥川には共通点が見られるわけで、芥川の創作へのハーンの影響というものは興味深いテーマである。代表作「羅生門」の成立事情に関わるとなれば、なおのこと重要な問題である。しかし言うまでもないが、「羅生門」にはハーンの名が登場するわけではなく、その影響について論証することが難しいのも事実である。

芥川の具体的な作品への影響を見る上では、まずは、小説の中で初めて直接ハーンの名に言及した作品について検討しておく必要があるだろう。芥川がハーンの名に触れながら書いた初めての作品は、羅生門の1年後に発表された「煙草³」である。

日本に煙草がもたらされたのは、フランシス・ザヴィエルが日本に天主教を広めに来たときに一緒に連れてきた悪魔が広めたのだ、というのが「煙草」の基本的な設定である。日本に着いた悪魔は切支丹を誘惑しようと思ったが、まだ布教が始まったばかりで、肝心の誘惑する相手がおらず退屈してしまう。そこで園芸でもやって暇を潰そうと考えた悪魔は煙草畑を作るが、そこに牛商人が通りかかって、「その花は何でございます」と尋ねる。悪魔は、三日のうちに花の名を当てたらこれを全部譲るが、当たらなかつたら「あなたの体と魂とを、貰いますよ」と

1 「羅生門」『帝国文学』大正4年11月

2 神田由美子「芥川龍之介と小泉八雲」『芥川龍之介研究年誌』平成19年3月

3 「煙草」『新思潮』大正5年11月。のち、単行本『煙草と悪魔』新潮社、大正6年11月収録時に「煙草と悪魔」と改題

言い、正体が悪魔であることを明かす。牛商人は悪魔の裏をかくために一計を案じ、牛に悪魔の畑を荒らさせる。悪魔は「この畜生、何だって、己の煙草畑を荒らすのだ」と怒鳴ってしまい、牛商人は煙草の名を知ること成功する。牛商人はまんまと煙草を自分のものにし、悪魔は敗北したわけだが、結果として、煙草が日本全国に普及することになり、日本人は墮落することとなった。

「毘留善麻利耶びるぜんまりやの加護」を願った牛商人が勝利し、悪魔が敗北した結果が人間の墮落に繋がる、という逆説が語られているわけだが、ハーンへの言及は、この話の末尾のあたりにある。

それから序に、悪魔のなり行きを、簡単に、書いて置かう。彼は、フランスス上人が、帰つて来ると共に、神聖なペンタグラマの威力によつて、とう／＼、その土地から、逐払はれた。が、その後も、やはり伊留満のなりをして、方々をさまよつて、歩いたものらしい。或記録によると、彼は、南蛮寺の建立前後、京都にも、屢々出沒したさうである。松永弾正を翻弄した例の果心居士と云ふ男は、この悪魔だと云ふ説もあるが、これはラフカディオ・ヘルン先生が書いてゐるから、ここには、御免を蒙る事にしよう。

このハーンへの言及については、前述の神田由美子のほかに大高知児⁴、寫田明子⁵など、多くの「煙草」論で触れられてきた。しかし、これらのいずれの論でも指摘がないが、実は、ハーン作品“*The Story of Kwashin Koji*”⁶を読むと、果心居士が悪魔だったということはどこにも書かれておらず、芥川の紹介は決して適当なものではない。そもそもハーン作品では、果心居士のエピソードは松永弾正が登場するものではなく、織田信長や明智光秀が登場するもので、果心居士は幻術を使うとは言え、乱暴な大名や武将を懲らしめるものであって、倫理的に負の価値を与えられた悪魔的なものとも言いがたい。

果心居士が当時の切支丹と関わるものだという理解は、一部には存在していた⁷ようだが、ハーンはそのようなことにさえ触れておらず、そもそもこれは切支丹文化と関わる作品ではない。ハーンが典拠とした石川鴻斎『夜窗鬼談』でも、「善ヲ勸メ悪ヲ懲シ、以て仏道ニ誘導ス」とあり、はっきり仏教的な存在として描かれている。

つまり芥川は、物語の内容上は引き合いに出す必然性のないハーンを、ここであえて持ち出

⁴ 大高知児「芥川龍之介初期作品の世界——「煙草と悪魔」を中心とした覚え書」『中央大学国文』昭和57年3月

⁵ 寫田明子「「煙草と悪魔」論」『芥川龍之介研究年誌』平成22年9月

⁶ “*The Story of Kwashin Koji*”, *A Japanese Miscellany*, Little, Brown, 1901

⁷ たとえば1708年以降成立とされる「南蛮寺興廢記」の異本の一つに、別の切支丹関係のエピソードについての割注で「これより前に果心居士という者が、松永弾正の望みによって幽霊を出した事がある。この果心も伴天連の門徒であろう」とあることが、海老沢有道訳『南蛮寺興廢記・妙貞問答』平凡社、昭和39年3月で紹介されている。

したということになる。これはなぜだろうか。

芥川がハーンの名を出すときに、その情報の出典が確認できない例は他にもあり、これについては稿者も触れたことがある⁸。「小泉八雲は人間よりも蝶になりたいと云つたさうである」という「侏儒の言葉⁹」の言葉がそれであるが、どうやら芥川がこのようにハーンの名を出すときには、単に引用するのではなく、引用する必然性がないにもかかわらず、情報を偽ってまでハーンの名を出したい何かの事情があるようなのだ。

「煙草」は切支丹物の第一作目として知られており、『羅生門¹⁰』に続く芥川の二つ目の単行本『煙草と悪魔¹¹』では本作が改題されて標題作となるなど、芥川が自身の切支丹物の出発点として重く扱ってきた作品である。その作品で、なぜ芥川は悪魔とは関係のないハーン作品をわざわざ引き合いに出したのだろうか。

結論を先取りすれば、これは芥川が切支丹物を書くにあたって、ハーンが日本に紹介したボードレールなどのフランス象徴詩の日本移入の問題を一貫して意識していたことのサインではないだろうか。以下、ボードレールを中心に日本へのフランス象徴詩移入の歴史を整理し、それが芥川にどのように受け継がれていったのかを見ていきたい。

2、日本のボードレール受容

日本のボードレール受容については、矢野峰人が比較文学学会会報で20年にわたって連載したもの¹²で丁寧にまとめていて、それが今も基礎的な情報となり得るものであろう。

それによれば、東大でボードレールの講義をした最初の人物は、かつてボードレールの英語圏への紹介者も務めたラフカディオ・ハーンで、この講義は「少なくとも明治三十五年以前には行はれてゐるのであるが、残念な事には、当時の英文科学生の間には何等の反響をも産む事無く、空しく消え去つた」と矢野は述べている。

これに続く形で、最初期に大きな役割を果たし続けたのは、ハーンが「the one Japanese student in ten thousand¹³」（一万人中一人の日本の学生）と賞賛したことで有名な教え子、上田敏であった。特に、彼が訳したゼルハアレン「仏蘭西の哀観詩人¹⁴」におけるボードレール

⁸ 小谷瑛輔「注釈」『侏儒の言葉』文藝春秋、平成26年7月、小谷瑛輔「蝶になりたい小泉八雲」『ヘルン研究』平成28年03月

⁹ 芥川龍之介「侏儒の言葉」『文藝春秋』大正12年11月

¹⁰ 芥川龍之介『羅生門』阿蘭陀書房、大正6年5月

¹¹ 『煙草と悪魔』（新潮社、大正6年11月）

¹² 矢野峰人「日本におけるボードレール」『日本比較文学学会会報』昭和21年10月～昭和50年1月

¹³ 上田敏「WILLIAM COLLINS」へのハーンの添削『定本上田敏全集』第8巻、教育出版センター、昭和60年3月

¹⁴ 上田敏訳、ゼルハアレン「仏蘭西の哀観詩人」『帝国文学』明治34年6月

解説は、『最近海外文学続編¹⁵』や『海潮音¹⁶』にも再録され、その後日本におけるスタンダードなボードレール理解を提供する Sterm による英訳本が 1907 年後半頃に普及するまでの、最もインパクトのある紹介であったと思われる。矢野も、日本でボードレールへの関心が高まるのは『海潮音』刊行後であったと述べており、この紹介が画期となったと論じている。ただし、このヴェルハーレンの文章は原書が不明とされており、大場恒明¹⁷は次に引用する論文で、今まで見つかっていないのは、生原稿から直接翻訳したなど特殊なケースなのではないかと推測している。

オスマン・エドワーズは、イギリスにおけるヴェルハーレンのもっとも早い紹介者で、1895 年 4 月 *Daily Chronicle* と、1897 年 11 月アーサー・シモンズが主宰する文芸誌 *The Savoy* にヴェルハーレン論を発表し、のちに 1915 年、ヴェルハーレンの劇作品「僧院」を *The Cloister* と題して英訳するなど、1894 年以来ヴェルハーレンと親交があり、また、当時、東京には、B.H.Chamberlain や、明治 29 年（1896）年以来東京帝国大学講師になっていた小泉八雲（Lafcadio Hearn）など、ヨーロッパの文学界の情報をたえず受信している知識人たちがいた。（中略）エドワーズは明治 31（1898）年来日し、各地を訪れ伝統演劇を調査しながら半年滞日し帰国後、成果を出版しているし、滞日中はチェンバレン、ハーンと交流し、特にハーンとは親交を結び帰国後ヴェルハーレン詩集を贈っているほどである。

（中略）

ヴェルハーレンを最初に日本文学界に紹介した功績者はおそらく上田敏であり、その文献は前述の「瀛西芸録」であると思われるが、上田敏は、フランス語については第 2 外国語としての素養はそなえていたものの、彼がフランス語圏の近代文学についての知識を得ていたのは、主として英語文献を通してであった。19 世紀末、明治 30 年代はイギリス文学者たちの間でヴェルハーレンが注目されはじめていた時期であり、上田敏は、ハーンなど東京帝国大学の講師たちからも、英文芸誌などからも、ヴェルハーレンに関する情報を得ていただろう。

（中略）

オスマン・エドワーズとヴェルハーレンとの親交、エドワーズ来日の折のチェンバレンやハーンなど上田敏の近くにいた人たちとの交流などの人間関係を考えるとき、この可能性（稿者注：上田敏がヴェルハーレンの生原稿を入手して翻訳した）も無視できないのではないか

¹⁵ 上田敏『最近海外文学続編』交友館、明治 35 年 3 月

¹⁶ 上田敏『海潮音』本郷書院、明治 38 年 10 月

¹⁷ 大場恒明「日本におけるエミール・ヴェルハーレン受容史のための基礎的作業序説」『国際経営論集』平成 16 年 3 月

と思われる。

ハーンが東大でボードレール講義をしていたのは、ちょうどこの「仏蘭西の哀観詩人」の訳を上田敏が発表した頃でもある明治 34~35 年頃とされているが、上田敏自身はこれよりずっと前に大学を卒業している。上田敏がボードレールを受容するにあたって、どの程度ハーンから教えられたのかということは、こうした時期的なずれもあってはっきりしたところはないが、上記のように、随所でハーンに関わりによるところが想定されてきたのである。

さて、このようにボードレール受容は上田敏が主導していたわけだが、これが日本の文学に直接影響を与えていく最初の例は、木下杢太郎や北原白秋における南蛮趣味・異国趣味の作品だと言われている。たとえば、矢野峰人は木下杢太郎「暮れゆく島¹⁸」についてボードレール "Parfum Exotique" の模倣が明らかだとしており、これをボードレールの影響を受けた日本人の創作の最初の例としている。また、杢太郎は、上田敏『海潮音』経由でフランス象徴詩の影響を受けたことを自ら語ってもいる¹⁹。

しかし、上田敏の影響下に出発した南蛮趣味の作品ということでは、杢太郎よりも白秋の方が早いという指摘がある²⁰。上田敏は『海潮音』に収めたオオバネル「故国」の翻訳にあたって、「波羅葦増雲」という語を用いており、「故国」の訳に波羅葦増雲とあるば、文禄慶長年間、葡萄牙語より転じて一時、わが日本語化したる基督教法に所謂天国の意なり」と自解しているが、フランス詩における、異国からの望郷の念やエキゾチシズムを日本文学で表現するにあたって内なる異国たる前近代の隠れキリシタンのイメージを利用したわけで、北原白秋や木下杢太郎は、まさにそうしたものとして²¹上田敏の影響下に南蛮趣味の文学を展開したのである。

3、東京帝国大学の講義におけるボードレール

ハーンの後、東大でボードレールを講義したのは、大塚保治「耽美主義の思潮」と松浦一「生命科学」であったとされている²²。

大塚保治のボードレール講義は、講義録『文芸思潮論 大塚博士講義集Ⅱ』²³によれば「唯美

18 木下杢太郎「暮れゆく島」『屋上庭園』明治 43 年 2 月

19 太田正雄（木下杢太郎）「明治末年の南蛮文学」『解釈と鑑賞』昭和 17 年 5 月

20 重松泰雄「「邪宗門」の南蛮詩と杢太郎」『語文研究』昭和 31 年 10 月

21 白秋が上田敏経由でボードレールの影響を受けていた点については、島田謹二「上田敏の『海潮音』——文学史的研究」『臺北帝國大學文政學部文學科研究年報』昭和 9 年、木俣修「北原白秋と外国文学」『学苑』昭和 31 年 3 月、河村政敏「北原白秋私見——ノヴァーリスの影響めぐって」『成城文藝』昭和 35 年 12 月などを参照のこと

22 島山達「日本のボードレール受容」『桜文論叢』平成 24 年 9 月

23 大塚保治『文芸思潮論 大塚博士講義集Ⅱ』岩波書店、昭和 11 年 3 月

主義の思潮 前篇（自大正四年九月至同六年七月）」となっている。

大塚保治は、夏目漱石の思い人であった大塚楠緒子の夫であり、また漱石「吾輩は猫である」に登場する美学者迷亭先生のモデルとも見られてきた人物だが、既に知られているように、ハーンの人生にも深く関わった人物である。漱石は、イギリス留学から帰国して東大の講師になった経緯について「留学中書信にて東京奉職の希望を洩らしたる友人（大塚保治氏）の取計にて、殆ど余の帰朝前に定まりたるが如き有様なる²⁴」と述べており、すなわちこのときにハーンは授業の受け持ちを減らすことを東大から提案され、それを拒んで解雇されているわけだが、この工作をしたのが大塚保治と考えられるのである²⁵。

同時期にボードレールを講義したもう一人である松浦一は、次の回想²⁶にも見えるように、ハーンの薫陶を受け、その後任で東大に来た漱石の授業も受けた人物である。

夏目先生が洋行から帰って、初めて大学に出られたのは、自分が未だ一年の時の第三学期（明治三十六年）からであつた。それ迄は小泉八雲先生が居られた。八雲先生は知つての通り、人柄なり思想なりどこ迄も詩人で、先生が一度現はれ一度口を開けば教室全体が忽ちにして詩化され、紫雲靉黳といふやうな気分統一されて了ふので、久しく其詩的空氣に酔はされてみた学生らは、先生が去ると聞くや痛惜する事甚しく、一年生の中には遂に転科するものをさへ生じた位であつた。従つて新任の夏目先生に対しては、何らの期待をも持つてゐなかつたと云つていゝ。

松浦は、のちに東大で教鞭を執り、「文学の本質²⁷」という講義に続いて「生命の文学」を講じているが、その「生命の文学」がやはりボードレール講義であつた。大正7年1月発行の講義録²⁸で「此書は私が一昨年「文学の本質」を発表した後、最近に東京帝国大学文科大学で文学概論として講じたものに基いたものであります」とあるが、畠山達²⁹によれば、その講義期間は、大正4年から6年にかけてであつたという。

この講義は、ボードレールの作品に見える主題について「基督のものであらうか。悪魔のものであらうか」と問いを立て、彼の「悪魔主義」について考察するものであつた。日本における悪魔主義といえは、文学史的には谷崎潤一郎に代表される、キリスト教とは直接関わらない

²⁴ 夏目漱石「序」『文学論』大倉書店、明治40年5月

²⁵ この経緯は伊藤整『日本文壇史7 硯友社の時代終わる』講談社、昭和39年などでも触れられている

²⁶ 松浦一「大学教授時代」『新小説』臨時増刊「文豪夏目漱石」大正6年1月

²⁷ 講義録は松浦一『文学の本質』大日本図書、大正4年11月

²⁸ 講義録は松浦一『生命の文学』東京宝文館、大正7年1月

²⁹ 畠山達「日本のボードレール受容」『桜文論叢』平成24年9月

ニュアンスで捉えられているが、東大の講義では悪魔と神のキリスト教的な二項対立のもとに、悪魔主義という思潮が捉えられていたのである。

加えて興味深いのは、たとえば次のような一節である。

我々が持つ尚ほ一つの興味は、かく神を呪詛し基督を愚弄する非基督教的態度其儘が、大乘仏教的解釈を加へて、基督教的ではなからうが真に宗教的、美的態度と言へることであります。仏教で仏と魔との区別を立てて其間の争闘を想像して居るのは小乗の事であり、大乘に至つては魔即法界と断ずるといふことは勝れたる見解として吾々の忘れることの出来ない事である。

ここでは、「大乘仏教的解釈」によって悪魔主義が理解されており、こうした仏教的な補助線による独特の解釈が試みられている。仏教的な土壌に受け入れられることで産まれる独特のキリスト教理解については、先にも述べた南蛮趣味の意匠にも見られたものであるが、それは必ずしも近世に見出される特殊なものというだけではなく、当時のアカデミズムの中において継続しているものであったのだ。

4、芥川龍之介の切支丹物

さて、こうしたハーン、上田敏、北原白秋、木下杢太郎、大塚保治、松浦一、谷崎潤一郎といった、日本のボードレール、フランス象徴詩受容を踏まえて、切支丹物と呼ばれる作品群を発表していったのが、芥川龍之介である。

芥川の切支丹物は、これまで、作者自身の信仰の有無はどうだったのか、信仰の問題についてどう考えていたのかという主体的なレベルが専ら考察されてきた経緯がある。また、そのルーツも切支丹文献に直接求められることが主であった。読者や研究者の信仰上の関心が大きく働いてきた為とも考えられるが、他方でそうしたバイアスを持って読まれてきたがゆえに、作品の成立を検討する上では手薄になってきた方面もあると言わねばならない。それが、このハーン以降の日本のフランス文学受容の系譜を芥川がどう認識し、継承したかという問題である。

芥川は、晩年に切支丹物のルーツについて、「キリシタンの徒に詩的感情を寄せたのは、先づ北原白秋氏や木下杢太郎氏だつたやうである。斎藤茂吉氏にも初版赤光には南蛮男などと云ふ連作があつて、僕などはそれらの先輩の造つた畝を歩いて行つた鴉である³⁰」「わたしは北原白秋氏や木下杢太郎氏の播いた種をせつせと拾つてゐた鴉に過ぎない³¹」というように、北原白秋や木下杢太郎の模倣について繰り返し語っている。

³⁰ 芥川龍之介「文芸雑談」『文芸春秋』昭和2年1月

³¹ 芥川龍之介「西方の人」『改造』昭和2年8月

白秋や壺太郎が、自身の信仰の問題としてというよりもむしろ異国情緒の表現の方法として近世の隠れキリシタンの世界を扱ったことはよく知られているが、芥川もまさにその二人を意識していると自ら述べているのであって、彼がのちに自ら聖書を読み、「西方の人」など、いわゆる南蛮趣味とは異なる形でキリスト教を扱うことになったとしても、それに至るまでの当初の切支丹物が作者自身の信仰の問題に専ら発したものと見るのはやはりこの点についての重大な見落としや飛躍を犯しているのであって、まずは西洋文学の受容の系譜を芥川がどう受け止めたかを検討する必要があるだろう。

しかも芥川は、白秋や壺太郎だけではなく、前述した大塚保治や松浦一の講義を受けていた。

まず、大塚について芥川は「僕の一番尊敬してゐる先生です³²」と友人への書簡で述べており、授業を受けていたときの自筆ノートも残されている。このノートは、翻刻、紹介した庄司達也らによって「芥川におけるボードレール受容といった点に関わる資料³³」と位置付けられてもいる。

松浦一については、「生命の科学」の前に行っていた「文学の本質」の講義録が出版された折、まだ大学に在籍中であった芥川は松浦の講義を受講していたことが分かっている。芥川は、「出席した講義は、大塚保治先生の「唯美主義思潮」と、松浦一先生の「生命の文学」ぐらゐなものである³⁴」として東大フランス文学の教授となる鈴木信太郎と同じような履修選択をし、当時最先端のフランス文学の知識を摂取していたのである。

芥川は松浦について、次のような書評³⁵を書いており、これは大手メディアに掲載された芥川の初めての文章でもある。

最後に自分は先生の新著を一貫してゐる或特色を挙げて此稿を完らうと思ふ。それは旧日本に対する先生の思慕である。乃至古東洋に対する先生の同情である。先生は其芸術観を世阿弥十六部集の中に発見し、其世界観を印度教的宇宙論の中に味得した。先生は其信念のユウトピアとして（先生の師事した小泉八雲氏の様に）当然愛撫の眼を過去の空に聳える不二山と椿の花とさうして煎茶の煙とに向はしめざるを得ないのである。

ここからうかがえるのは、芥川は、授業を受け、知識を吸収するにあたって、教師のさらに

³² 芥川龍之介、原善一朗宛書簡、大正3年11月14日

³³ 庄司達也・野呂芳信「芥川龍之介の聴講ノート「欧州最近文芸史 大塚教授 vol.1」翻刻」『東京成徳大学研究紀要』平成17年3月、「芥川龍之介の聴講ノート「欧州最近文芸史 大塚教授 vol.1」翻刻（承前）」『東京成徳大学研究紀要』平成18年3月

³⁴ 林健太郎編『回想・東京大学100年』ビデオ出版、昭和44年7月

³⁵ 柳川隆之助（芥川龍之介）「松浦一氏の「文学の本質」に就いて」『読売新聞』大正5年1月12日

師である「小泉八雲」にあえて思いを馳せ、その流れに自らを位置付けるような系譜志向である。また、外国文学の本質を日本に移入するにあたって、過去の日本への視線をそこに重ねていく発想が松浦の講義に見出されているが、それはまさに白秋や柰太郎が示していた南蛮趣味の発想に通底するものでもあろう。

松浦一がこの講義に続く、ボードレール論から開始される「生命の科学」の講義を行っている途中にあたる時期、大正5年7月に芥川は大学を卒業し、そして11月に、本稿の冒頭で触れた、最初の切支丹物である「煙草」を書いている。

芥川が「煙草」においてハーンの名を出すことには、かような背景を見て取るべきではないだろうか。つまり、上田敏の影響下で南蛮趣味の作品を書いた北原白秋や木下柰太郎の南蛮趣味に憧れ、ボードレール講義を提供していた松浦一や大塚保治に師事した芥川は、早い時期の日本へのボードレール紹介者であったハーンが上田敏や松浦一の師でもあることを当然認識しており、そうした系譜の中で水から学び、創作しているという意識があったのである。

芥川が、「悪魔」の話と関係ないはずのハーンの話をあえて引き合いに出すことによってここで示唆しているのは、彼の扱う南蛮趣味や「悪魔」表象が、ハーンから受け継がれてきているボードレールのモチーフの流れを汲んでいるということだったのではないか。あるいは、キリスト教と関係の薄い谷崎の「悪魔主義」が文壇でもはやされる中で、ボードレールの悪魔主義的に屈折したキリスト教を意識しつつ、またボードレール的なフランス文学のモチーフを移入するにあたっては隠れキリシタンの語彙を使う文学的伝統があることも意識していた芥川の、より最先端の知識に基づいた本物の「悪魔主義」作品を自分こそが書いてやろうという対抗意識をここに認めることもできるかもしれない。

なお、ボードレールやハーン、上田敏以降の受容への意識が芥川の切支丹物にどう関わっているかということについては、これまでの研究史でも、全く気付かれてこなかったわけではない。

たとえば、高橋博史³⁶は「煙草」の「〈南蛮の神が渡来すると同時に、南蛮の悪魔が渡来すると云ふ事は——西洋の善が輸入されると同時に、西洋の悪が輸入されると云ふ事は、至極、当然な事だからである。〉」などの部分に見られる主題について、「大正三年一月二日付、恒藤(井川)添(ママ)宛書簡中の〈自分には善と悪とが相反的にならず相関的になつてゐるやうな気がす〉といった言葉などとも照らして、一見もつともにも思える見解である」と述べている。実際、これは見事に照応する部分であり、妥当な指摘として首肯できる。

しかし、本稿でより重要なのは、ここで引用されている芥川の書簡は「兎に角矛盾せる二つのものが自分にとりて同じ誘惑力を有する也 善を愛せばこそ悪も愛し得るやうな気がする也

³⁶ 高橋博史「芥川龍之介「煙草と悪魔」——初期芥川龍之介論のためのノート（1）」『学習院女子短期大学紀』昭和61年12月

ボードレールの散文詩をよんで最なつかしきは悪の讚美にあらず 彼の善に対する憧憬なり 遠慮なく云へば善悪一如のものを自分は見てあるやうな気がする也（気がするると云ふは謙辞なるやもしれず）これが現前せざば芸術を語る資格なき人のやうな気がするなり³⁷」と続くボードレール論であり、また同時に「芸術を語る資格なき」とまで述べる芥川の核心にあった芸術論だという、高橋の論では触れられていない点である。

また、久保忠夫³⁸は、「煙草」で畑を荒らす牛が、典拠となった高木敏雄『比較神話学³⁹』には登場せず、原話からあえて変更された点であるとして、『海潮音』にも出てくる「黄牛(アメイウシ)」「水かひ場」であることを指摘している。これも非常に重要な指摘だが、上田敏を参照することの意味は考察されていない。

上田敏の訳した「水かひ場」はヴェルハーレンの訳詩だが、のちに芥川は、同じく上田敏が訳して『海潮音』に掲載したヴェルハーレンによるボードレール解説から語彙を借りて「黒衣聖母⁴⁰」という作品を書いており⁴¹、これもやはりボードレール受容の文脈に連なるものとして芥川に意識されていた詩人である。

本稿の分析から見えてくるのは、芥川が偽書のようにしてまでハーンに言及し、また上田敏を参照し、ボードレールについて書いていたような主題をこの初めての切支丹物に託したことには、一貫した芥川の意識があったということである。それは、繰り返して言えば、ハーン、上田、白秋、李太郎、大塚、松浦といったボードレール受容、あるいはより広くフランス象徴詩受容の系譜を踏まえて芥川が切支丹物を書いていたということであり、だからこそ芥川はこの最初の切支丹物で「悪魔」を扱い、また屈折を伴うキリスト教理解を常に描き続けたのである。

芥川の切支丹物のルーツとなったのが、キリスト教を拒んで日本に来たハーン以来のボードレール受容であったということは、ハーンにとっては皮肉な事態であろう。しかし、ボードレールのキリスト教理解は正統的なものというよりは「悪魔主義」と呼ばれるような屈折したものであったわけで、芥川研究において常に謎とされてきたテーマである彼の切支丹物におけるキリスト教イメージの独特の屈折は、実はそこに由来しているのではないか。それは、フランス象徴詩的な異国情緒を日本文学で表現する際に隠れキリシタンの語彙が格好のものとして機能するという先輩作家達の工夫とあわせて、芥川の切支丹物のベースを形作ったのである。

³⁷ 芥川龍之介、井川恭宛書簡、大正3年1月21日

³⁸ 久保忠夫「芥川の「煙草」の材源についてほか」『東北学院大学論集 一般教育』昭和63年09月

³⁹ 高木敏雄『比較神話学』博文館、明治37年10月

⁴⁰ 芥川龍之介「黒衣聖母」『文章倶楽部』大正9年5月

⁴¹ この点については日本比較文学会 第52回関西大会（平成28年11月12日）において「芥川龍之介「黒衣聖母」に見られるボードレール受容」として発表した。近日中に活字にすることを予定している。